

## 2016 年度秋季人権週間プログラム映画上映&講演

日時：2016年11月16日（水） 18:30～21:00

会場：立教大学 池袋キャンパス マキムホール MB01教室

# 『ザ・トゥルー・コスト ～ファスト ファッション 真の代償～』

講師 間々田 孝夫 氏（本学社会学部教授、  
人権・ハラスメント対策センター長）

中村 雪子 氏（本学ジェンダーフォーラム教育研究嘱託）

## 間々田氏による映画上映前の解説

### 【ファストファッションの台頭－浮き彫りになった社会問題とは－】

○間々田 きょうは大勢お集まりいただきまして、ありがとうございます。

今回私は二役兼ねておりまして、まず最初に主催者としての人権・ハラスメント対策センター長ということでご挨拶をさせていただきます。その後、バトンタッチをして解説をする人が出てくる、あるいは講演する人が出てくるんですけども、その解説役もまた私がするという二役になっています。どうしてかということ、ここに出てきます消費生活が私の専門ですので、その両方をさせていただきます。

まず、人権・ハラスメント対策センターでは毎年、計4回の講演会、あるいは上映会を行っています。人権週間プログラムと銘打ちまして、池袋と新座で開催しています。新座で2回、春学期、秋学期。それから、池袋で春学期、秋学期。きょうは池袋の秋学期のプログラムということになります。



当然、人権・ハラスメント対策センターなので、その関係の内容ですけれども、人権・ハラスメントといっても非常に広く、いろいろなテーマがあります。1つのテーマとして、発展途上国の、あまり楽に生活をしていない人を取り上げることがあります。発展途上国ですから、日本国内の、しかも身近な人権・ハラスメント問題ではないんですけども、安定した生活を送り、人間らしく生きるための権利が損なわれた人々という意味では、このセンターの活動に関係しているということで、これまでも何回か取り上げております。

今回はその一環として、『ザ・トゥルー・コスト ～ファストファッション 真の代償～』という映画を上映いたします。これは2015年にアメリカでつくられた映画です。あまり商業的な映画ではもちろんありません。日本ではユニテッドピープルという、社会的企業といえますか、社会性のある企業が配給している映画であります。

今回のテーマですが、ファストファッションというのがサブタイトルについているように、日本をはじめとする先進国では、この十何年かでファストファッションが非常に行き渡った、盛んになったという事情があります。ファストファッションは、ご存じのとおり、非常に安いわけですが、先進諸国では、あまり景気がよくなって、貧困層と富裕層の格差拡大ということが起きていますが、これは、その富裕でない人たちにとっては、ある意味で非常にありがたい存在であります。

ところが、ファストファッションが非常に安く提供されているということは、考えてみれば、安く作られているということです。安く作られる、あるいは作ろうとしているところではどういうことが起きているか、ということ扱ったのがこの映画です。

生産地はもちろん、いわゆる発展途上国です。今、先進諸国のアパレル産業はいろいろありますけれども、繊維を作るところから始まって、織物、そして最後の縫製、つまり縫って服にするというところまで、ほとんどが発展途上国で行われています。それを非常に

低コストで作るということは、おそらく低賃金で作っているんだろうということがわかります。その辺から始まり、それにとどまらず、環境問題、職場の状況、職場のあり方による事故、それから健康問題、その他さまざまなしわ寄せが来ているというところを取り上げた映画であります。

こういう映画は、実はご存じの方も多いかと思いますが、これまでは食品関係が比較的多かったのです。コーヒー、チョコレートというのもそういう途上国で安く作り、われわれがふんだんに消費してるものなのです。ただ、このファッション関係では珍しくて、この映画が私としては初めて見たものです。

これから 90 分見ていただければ内容はわかりますが、ここに配布した「映画の流れと趣旨」という資料があります。これは、内部的に非常に社会科学的な映画ですので、その内容をきちんとつかまえるためには、ちゃんとまとめたほうがいいかなということで、私がつくったものです。



この映画とこの資料の関係ですが、ちらちら見ながら映画を見ると、内容はよくわかると思います。しかし、逆にこれをあまり見すぎると、映画そのものの迫力が失われるというところもありますので、後ほど私がこのプリントに沿って解説はしたいと思っております。

なかなか興味深い映画ですので、どうぞお楽しみくださいと言いたいところですが、楽しむという言葉がいいかどうかという内容でもあります。娯楽という意味ではなくて、よく味わっていただければと思います。以上、短いですが、挨拶とさせていただきます。

### 【映画上映】

## 映画上映後の間々田氏、中村氏からの解説と質疑応答

### 【想像をはるかに超えた、負の影響—トウルー・コスト—】

○間々田 この映画では、ファストファッションが社会に及ぼす負の影響について様々な角度から描かれていますが、その論点はいくつかあります。

まず大きく取り上げられているのは、低賃金と貧困の問題です。ファストファッションは安く売るために途上国の労働者をきわめて低い賃金で働かせていますが、この問題があちこちで描かれています。この点については、特に、最後のほうのカンボジアのところで強調されています。カンボジアであまりに低賃金で暮らせないことからデモが起こったことが描かれています。

それから、職場の安全性。ラナ・プラザというところで（資料の S-4 というところにありますが）、かなり有名な、大きな事故がありました。この事故はまさにコストを削減して、ビルの物理的条件を整えなかったことが原因です。最低の、ギリギリの工場の条件であったために倒壊してしまいました。そういう主旨で取り上げているわけですね。（P.7 参照）

それから、環境汚染です。これについては資料のパート1からパート2にかわって、そこで話が切り替わっています。環境汚染は色々なところで起こっていますが、例えば、遺伝子組み換え作物の大量生産による問題が、S-9 にあらわれていたと思います。

そして、健康被害。これは映画の最初の方で、いきなりテキサスの綿花の農場が出てきて、何のことかと思ったでしょうが、結局、農薬大量散布によって、そこに出てきたリア・ペッパーという女性の夫ががんになって死んでしまったというお話です。

低賃金、安全性、環境汚染に関しては、それとは別に皮革産業が取り上げられています。革の産業というのは、実はファストファッションとはちょっと違う話で、どちらかというところと高級ファッションのところに出てきているので、ここはちょっと話がずれていると思いましたが、高級ファッションを含めて、ファッション産業の健康被害、環境汚染ということもS-16あたりで言っていたわけです。

そしてもう1つ、5番目として、家族の分離というのを描いていました。シーマという女性労働者が何度も出てきて、最後には親子別れ別れになるというようなことを描いています。

以上のようなひずみ、犠牲があちこちに出ているということを描きつつ、しかし、その犠牲の上にわれわれのファストファッションがあると主張しているのです。

ファストファッションの消費についても何回か出てきていますが、われわれが本当に大量に、安い衣料をどんどん、取っ替え引っ替え消費することが、どれだけ幸福につながっているかというような問いかけがあるかと思います。そういう面ではある意味、非常にわかりやすい、はっきりした映画だと思います。

私自身は、大体知っていることではありましたが、現場の生々しい映像や、ここで初めて見たものがたくさんありました。それから、個人的にはあまり知らなかったこととして、S-12 があります。余ったファストファッションの大量の廃棄物ですね。それがハイチに大量に寄附されているのです。ところが、寄附された大量の廃棄物が、売れないというか、1割しか利用されない。それだけではなくて、それが大量に出回って地元のアパレル産業

や被服産業が壊滅状態になった。あの辺までは私も想像が及ばなかったので、個人的にはその辺が非常に深刻な問題だなと思いました。

### 【負の連鎖に対抗する動きの登場】

そういう状況が描かれて、しかし、その中でそれを解決していこうという動きもかなり描かれています。ここに来ていらっしゃる方は多くご存じだと思いますけれども、フェアトレードですね。そういう搾取的な生産でない形で生産していこうというフェアトレードの動きが S-6 です。そこでサフィア・ミニーという、日本に拠点を持つイギリス人が登場し、彼女は別のところにも2回ぐらい登場して、フェアトレードの動きがかなり広がっていることを示しています。S-14にも出てきます。

それからもう1つ、健康・環境面では、オーガニックコットン。オーガニックコットンというのは、これはあまり知らない人が多いですけれども、S-15で紹介されています。残念ながら、オーガニックコットンの現物、どんな形で出てくるかということは紹介されていませんでした。

ちょうどそこでS-15の右側を見ていただくと、トゥルー・コストという意味がどういう意味かがわかるようになっています。

そして、最後のほうは結構インタビューみたいなものが多くて (S-18、19あたりですね)、やや理屈っぽいと思われたかと思うんですけれども、これについてはちゃんとストーリーができていまして、要するに、ひたすら安くたくさん消費するという形では矛盾が広がるばかりであるということ、少し社会科学的に分析しようとしているということなんです。

いろいろな人がでてきますが、実はその中には、先ほどいった新しい動きをリードしているような人が出ています。私も知らないような人も何人かいます。聞き漏らされたかもしれないかもしれませんが、エシカルファッションということが登場している。エシカルファッションといっても、あまり聞いたことがない人がいるかもしれませんが、ファッション産業自体が倫理的な配慮をした産業にならなければいけないという考えで活動してる人たちがいます。ここに出てきた人については、インターネットなどで調べてみますと、かなりいろいろな情報がわかるのではないかなと思っています。

### 【消費者として理解すべきこととは】

それで、結論はどうかということですが、この映画の結論というよりは、意図、ねらいですけれども、ねらいは、恐らく私がアンダーラインで引いたあたりにあると思っています。アンダーラインはS-13とS-19に引いてあります。S-13で、消費活動の影響を認識している顧客が望ましく、消費者の配慮ある行動なくして環境問題は解決できないと述べられている。これはパタゴニアの副社長の話だったかと思います。そのあと、消費者は自分の力に気づくべきだというようなことが載っています。

要は、消費者というのは、そういういろいろな問題のもとになっているので、発展途上国の国々でどんなことが起こっていて、低賃金問題あるいは環境問題など、どのようなことをもたらしているか、そこをわかっているような人であるべきだということです。単に

消費するだけではない。社会的なことは理解しているような消費者になるべきであるし、そうあってほしいという思いでこの映画は作られているということです。

S-19 は、特にファッション産業について言っているところです。その最後のところに出てくるルーシー・シーグルという人（S-19 の左側の下のほうにあります）、どうもこの人が総責任者のようです。何気なく画像に出てきて、何回か登場していますが、恐らくこの映画全体の総監督というか、制作の指揮をとったようです。その人が述べていたことですが、消費者は服がどこから来て、誰がどのように作ったか、そこで何が起きているか理解しなければいけない。これはまさに、先ほど言ったようないろいろな問題が起きていることを理解しなければいけないということです。

### 【行き過ぎた物質主義に変革を起こせるか】

理解した後でどうするかという問題があります。ここは非常に大事なところですが、忘れてはいけないのは、確かに問題は山積しているけれども、他方では、われわれが買っている衣服によって、その地域の経済は支えられているということもまた確かだということです。ファストファッションをやめようといって、みんながやめてしまったら、今度は失業というもっと深刻なことが起きてしまう。あるいは、コットンの大量生産をやめたら、今度はその綿花の農場がつぶれてしまう、そういうことがあるのです。だから、一方で利益を得ながら、他方では傷つけている。この複雑な関係があるので、ではどうすればいいかというのは非常に難しい問題です。しかし、そういうことを含めて考えていくべきであるということです。それ以上のことは、今は言えないということだと思います。

この映画は、一回みただけではよくわからないかもしれませんが、専門家、あるいはこの分野でかなり活動している人に一生懸命インタビューして、相当まじめに作った映画です。恐らく、アパレル産業の、現にファストファッションを作っている人から見ると、偏った映画である、こんなにひどくないというような意見はたくさん出てくるかもしれませんが、この種の映画は常にそうなんですけれども、一番悲惨なところを取り上げるのです。悲惨でない企業もあるかもしれない。その辺はもちろん考えなければいけない。

しかし他方では、そのファストファッション産業から、表立って、われわれはこれだけちゃんとやっていますという、全体像をきちんと報告して全面否定するような報告書が出ているかという、それもまた出ていないです。だから、当たっているところがかなりある。全面否定はできないということです。

それと、今はファストファッション産業も社会的責任ということは、いちおう謳っていることが多いんですね。ホームページとか見ると、これだけ社会的配慮をしていますというような記事はいくらでもあります。でも、それはすごく断片的なのです。だから、本当に責任を持って経営していて、全然問題ないと言えるほどのものでもないということだと思います。その辺も含めて、映画というものは、やはり一番強調しなければいけないところを強調しますので、その点は理解していただきたいと思います。

ファストファッション産業では、シーマをはじめ、女性が労働者になることが多く、ジェンダーの問題にも関係しますので、この後はそちらの話につなげさせていただきたいと思います。

## PART1 ファストファッションの台頭～搾取工場の矛盾

場面	主旨	
S1	イントロダクション	語り手：衣服と世界の関係を調べたことにより、服に対する見方が永久に変わった。
S2	ルーシー・シーゲルの語り(ジャーナリスト、作家、キャスター、この映画の制作責任者)、オルソラ・デ・カストロ(ファッションデザイナー)の語り、過去のファッションの映像、イラスト、ロジャー・リーの語り(中国の下請け企業CEO)	衣服は個性の表現/ファッションシステムの大変動:大企業の利益追求としてのファストファッションが台頭している。/アメリカの国内生産は激減した。
S3	ファストファッションの紹介(企業ロゴ、消費のようす、対談場面)、ジョン・ヒラリー(ウォー・オン・ウォント・事務局長)の語り	ファストファッションのシステムの説明:最も人件費の安いところに自由に生産地をシフトさせる。発展途上国の企業に対しては、低価格化圧力が非常に強い。
S4	バングラデシュの首都ダッカの工場のような、工場主アリフ・ジェブテイクの語り、CNNのニュース:ラナプラザビル倒壊事故、従業員の語り、ルーシー・シーゲルの解説、事故の様子解説、ジョン・ヒラリーの解説、再びCNN、ロジャー・リー	低価格生産のしわ寄せが最底辺の労働者(おもに女性労働者)に来ている。賃金の低さだけでなく生命の安全性が損なわれている。その間ファストファッション企業は最大の利益を上げた。
S5	ベンジャミン・パウエル(自由市場研究所所長)、ケイト・ベルニヤング(ジョーフレッシュ元調達部門主任)の語り	搾取工場(スウェットショップ)の現状の擁護論:工業化プロセスの一段階、ほかの産業の労働条件はもっとひどい。
S6	フェアトレード企業家サフィア・ミニの活動の様子(ロンドン、東京)、世界フェアトレード・デー	搾取のないファッション産業のシステムも盛んになっている。
S7	ダッカ 被服産業労働者シーマ・アクタルの語り、モウラー・チョウドリー(シーマの工場主)の語り	労働組合活動への経営者側からの妨害がある。

## PART2 環境悪化と健康被害

S8	テキサス 綿花生産者リア・ペッパーとその義兄弟カール・ペッパーの語り	綿花生産の工業化、大量農薬散布が生態系への危険を招いているのではない。
S9	モンサント(巨大アグリビジネス企業)のコマーシャル、インドの環境活動家ヴァンダナ・シヴァの語り、ジャグディサン・ティルワーディ(モンサント元取締役)の語り、インド・パンジャブの綿花農園と周辺農村の様子	遺伝子組み換え作物の危険性/種の独占販売が企業利益と生産者の貧困をもたらしている。/土壌汚染による生態系破壊、殺虫剤大量使用による健康被害(中毒、がん、奇形など)が顕著に現われている。自殺も多発している。
S10	ティム・カッサー(心理学者)の語り、マーク・ミラー(メディア文化学)の語り、広告の実例、買い物をした消費者の映像	広告によって消費者は消費を通じて幸福を追い求めるよう唆される。消費によって満足と他者の評価が得られると説得される。しかし、そのような消費はほんとうに幸福を生み出すのだろうか。
S11	ミラノの投資顧問ガイド・ブレラの語り、マークミラーの語り、衣服の使い捨てを勧める広告	ファストファッションは、これまでと全く異質なものであり、衣服の消費と廃棄のスピードを著しく速めている。ファッションはどんどん安くなって消耗品化している。
S12	クリスティーナ・ディーン(リドレス設立者)の語り、ルーシー・シーゲルの語り、衣料廃棄物の堆積した現場の映像、カトリーヌ・シャロー(デザイナー)の語り、ハイチの寄付された衣類、縫製工場の映像	ファストファッションの大量消費の結果、膨大な廃棄物が出されており、環境汚染をもたらしている。/廃棄物の一部は発展途上国に寄付されているが、多すぎて1割程度しか利用されない。そして大量の寄付されたファストファッションの消費が、発展途上国の被服産業を壊滅させ、ファストファッションの下請けへと追いやっていく。
S13	パタゴニア(アパレルメーカー)の副社長の語り、ファッションショーの様子、ステラ・マッカートニー(デザイナー)の語り	消費活動の影響を認識している顧客が望ましい。消費者の配慮ある行動なくして環境問題は解決できない。/消費者は自分の力に気づくべきだ。

## PART3 対抗する動きの登場～消費資本主義システムの分析

S14	バングラデシュ・ラージシャヒーでのサフィアミニと現地企業スワローズの活動の様子	フェアトレードファッションによって、途上国の生産者の安定的で非搾取的な雇用と、先進国消費者のファッションとは両立する。ただ、まだその考え方は逆の行動をとる関係者も多い。
S15	リア・ペッパーの語り、オーガニックコットンの農場の映像	綿花生産者への健康被害への対抗策として、オーガニックコットンが作られているが、価格は高く、まだふるわない。しかし、健康や環境に与える負の影響(トウルー・コスト)を考えれば、高いとは言えないかもしれない。
S16	ラケーシュ・ジャエシュワル(エコフレンド創業者)の語り、インドカンパールの皮革産業の映像、皮膚病など健康被害の映像、サティッシュ・シンハ(トキシックリンク副所長)の語り、マイク・シュラガー(サステナブルファッションアカデミー設立者)の語り、環境活動家ヴァンダナ・シヴァの語り	皮革産業など、他のファッション関連産業も環境汚染と健康被害を生み出している。高級ファッションであっても、環境汚染や健康被害につながる可能性がある。ファッションは今や石油産業に次ぐ環境汚染源である。しかし、それらはコストに反映されていない。
S17	被服産業労働者シーマと娘ナディアの別れ(村の実家に預ける)、シーマの切々とした訴え、CNNニュース、リヴィア・ファース(エシカルファッションの提唱者)の演説、H&M幹部との討論	ファストファッションは、製作現場では労働者(特に女性労働者)の生活を犠牲にしている。また、極めて低い賃金で搾取している。/企業は最低生活に必要な賃金さえ払おうとしない。
S18	カンボジア・ブンベン: 繊維産業労働者のデモ、警官隊との衝突、ソチュア・ム(人権活動家)、サム・ランシー(救国党党首)、ジョン・ヒラリー、バーバラ・ブリッグス(労働基本権研究所理事)、ルーシー・シーゲルの語り、CNNニュース	途上国の政府は、企業が他国に移転しないように、労働法による取り締まりを行わず、労働者を取締りの対象とする。ファストファッション産業は、直接に現地での雇用を行わず、現地企業から買い付けるので、責任を追わない。現地政府は、自由貿易を阻害するとして、労働者を守る法律を執行しようとする。
S19	リチャード・ウルフ(経済学者)、タンシー・ホスキンス(『スッチアップ』著者)、ティム・カッサー、アメリカ・ブラックフライデー(*)の買物の様子を伝える広告とニュース、それと対照的な途上国の姿が交錯、シーマとナディアの別れ、ナディアに対する思いの語り、リア・ペッパー: 夫の死とオーガニックの必要性についての語り、サフィア・ミニ、リチャード・ウルフ、ヴァンダナ・シヴァ、ルーシー・シーゲルの語り、先進国と途上国の映像が交錯、突然渋谷も登場、エンディング	資本主義のシステム自体が、途上国の労働者からの搾取をもたらしている。資本主義体制の帰結だ。環境問題を深刻化させているのも資本主義だ。システムを変えなければならない。より具体的には、利益を人びとが分かちあう体制にしなければならない。/消費者は服がどこからきて、誰がどのように作ったか、そこで何が起きているかを理解しなければならない。

(\*)アメリカの感謝祭の翌日の金曜日。クリスマス商戦開始の日。

○中村<sup>1</sup> ただいまご紹介にあずかりました中村雪子と申します。本学ジェンダーフォーラム<sup>2</sup>の教育研究嘱託員をしております。

最初に少しジェンダーフォーラムの紹介をさせていただきます。ジェンダーフォーラムは、池袋キャンパス6号館の1階にあり大学内外に開かれた場として運営されています。この上映会にも共催として名前を連ねていますが、ほかにもジェンダーセッションや公開講演会、映画上映会など、オープンなイベントを年3、4回開催する活動も行っています。詳細は配付資料の中にあります『Gem ニュースレター』をご覧ください。宣伝になりますが、12月16日に新座キャンパスで開催予定の第70回ジェンダーセッション「保育不足に親たちはどう対処してきたか」のチラシも挟み込みましたので、関心のある方はぜひご参加ください。

私自身に関してですが、私は、開発途上地域における開発による影響や変化をジェンダー視点から分析する「開発とジェンダー」研究を専門としておりまして、インドのラージャスターン州の女性酪農協同組合についての調査研究を行っております。南アジア地域を専門としていますので、この映画の主な舞台の一つであるバングラデシュへの関心もありますし、多少なりとも学んできたこともあったので、解説をお引き受けいたしました。



最初に、使用するパワーポイントと、配付資料の説明をします。配布資料にはスライド6枚分が印刷されていますが、投影するスライドには内容が付け加えられています。参考文献リスト<sup>3</sup>もお配りしていますが、最初の「グローバルゼーションとジェンダーの政治経済学」は、おおまかにプレゼンテーションで触れるテーマの順番で文献をあげていますが、プレゼンテーションでは直接的には参照していない文献も含まれています。また、④と⑦～⑩が理解を深めるためのものになります。③、⑤、⑥は学部生向けに書かれたテキストに所収されている文献ですので、比較的読みやすいと思います。「2」として、バングラデシュの女性縫製工場労働者が主要なテーマとして含まれるジェンダー視点からの研究書を2点紹介しています。①はバングラデシュにある日本のファストファッションブランドの工場でのフィールド調査の内容を基に、女性工員の存在も含めバングラデシュの工業化をグローバルな政治経済構造の変化に位置付けジェンダー視点から分析した日本人による研究書です。②の著者であるナイラ・カビール (Naila Kabeer) は、現在のバングラデシュを含むベンガル語が話されている地域出身の研究者で、長年「開発とジェンダー」研究

<sup>1</sup> 本講演録では、講演内容に加え、時間の問題で触れられなかった内容も適宜加筆修正補足している。

<sup>2</sup> 詳細に関しては、ジェンダーフォーラムのホームページ (<http://www.rikkyo.ac.jp/research/institute/gender/>) を参照。

<sup>3</sup> 本講演録では、本稿で加えられた文献とスライド(番号に「\*」につけてあります)も掲載した。そのため、各文献につけられている番号は講演時の配布資料と異なっている個所がある。また、本講演録作成時で参照した文献リストに掲載されている書籍の個別の論文に関しては、脚注で文献情報を示した。講演時には言及していない文献に関しても、新たに説明を加えている。

の領域において多くの研究蓄積を残し、その理論的發展にも貢献しています。本書は、バングラデシュの首都ダッカの女性とバングラデシュからロンドンに移住した女性の、縫製産業における就労に関わる「意思決定」に焦点をあてた研究です。専門的な内容になりますが、関心のある方はぜひ手に取ってみてください。3番目に映画に関連した読みやすい本として、3冊あげています。①のアジア女性資料センター<sup>4</sup>の機関誌『女たちの21世紀』（「装いのポリティクス」特集号）では、映画でも主要なテーマであったファストファッションを作る側と売る側・着る側の非対称性に関するレポートと共に、日常的な「着る」という行為がはらむ政治性も取り上げています。②の『ファストファッションはなぜ安い？』という本は、日本の人権NGO ヒューマンライツ・ナウ<sup>5</sup>の事務局長の方が著者で、実際に中国にあるファストファッションの下請け工場での調査内容などが含まれており人権の観点からの問題点を指摘しています。③は、先述した2-①の本をベースにしてより分かりやすく書かれた本です。4番目の『ザ・トゥルー・コスト』の出演者による著書は、最後にとりあげます。（18頁、23頁参照）

皆さんご覧になったように、また、先ほど間々田先生も言及していましたが、この映画が作られたきっかけは、バングラデシュの首都ダッカにおいて縫製工場が入ったビル、ラナ・プラザが倒壊して多くの労働者が亡くなった事件でした。映画全編を通して、ファストファッション産業の末端の生産者として、バングラデシュの縫製工場の労働者である女性たちが主要な登場人物として映し出されていました。

彼女たちのように、開発途上地域の海外輸出向けの工場において低賃金で雇用される女性たちの状況は、「開発とジェンダー」研究やフェミニスト・ポリティカル・エコノミー論の主要なテーマの1つとして多くの研究蓄積があります。この解説では、それらの研究蓄積から、ここに示しました4つの内容を紹介します。

### 【器用な指先—“nimble finger”—】

まず、「器用な指先<sup>6</sup>（nimble finger）」という用語が象徴的な研究について紹介します。1960年代以降、第3世界の世界市場向けの縫製工場や精密機

主要な登場人物：  
バングラデシュの縫製工場の労働者である女性たち

- 「開発とジェンダー」研究、フェミニスト・ポリティカル・エコノミー論
- 1. 「手先が器用な女性たち」
- 2. 新国際分業と女性
- 3. グローバリゼーションの最新局面
- 4. グローバルなアクティビズムとバングラデシュの女性労働者

スライド1

1. 「手先が器用」な女性たち“Nimble Finger”

- Nimble Finger: 縫製工場や精密機械を製作する輸出加工区において、若年の女性たちが多く就労している現象についての「開発とジェンダー」の研究（Elson & Pearson 1981）。
- なぜ若年の女性たちが雇用されるのか？
- それまで近代セクターにおいて就労する機会が少なかった若年女性たちが多く工場労働に従事することによって、女性たち自身や、家族、コミュニティにおいてはどのような変化が生まれたのか？

スライド1

<sup>4</sup> ジェンダーやフェミニズムの視点から活動を展開している日本の女性NGO。詳細はHP（<http://www.ajwrc.org/jp/>）参照。

<sup>5</sup> 詳細は団体HP（<http://hrn.or.jp/>）参照のこと。

<sup>6</sup> 講演時には「手先」としたが、本稿では「指先」とする。

器を製作する工場において、若年の未婚女性が多く就労している現象に注目した最初期の研究として、ダイアン・エルソン (Diane Elson) とルース・ピアソン (Ruth Pearson) による「器用な指先」というタームをタイトルにした研究 (参考文献リスト 1-①) があります。映画を見ていて、なぜ、若年女性たちが雇用されるのか、という疑問をもたれた方々もいらっしゃるかもしれません。そこには次の四点に代表される人種化された新植民地主義的なまなざしをともなったジェンダー観が作用していることが明らかになっています<sup>7</sup>。一点目に、「生まれつき指先が器用で忍耐強い女性たちは細かい作業に向いている」という女性に関するステレオタイプな認識があげられます。これは、本質的に女性がそのような性質を持っているという意味ではありません。例えば縫製という作業の場合、女性たちは現地のジェンダー役割分業のもと上の世代の女性たちから縫製という仕事を「訓練」された結果、「熟練」もしくは「半熟練」の存在になっているにも関わらず、その「訓練」は私的な行為であったため、公的に評価されず本質的にそのような性質を持っているとみなされたのです。二点目に、世帯の中で女性は補助的な稼ぎ主である、という経済的性別役割分業観を前提とし、その女性に支払われる賃金は安くてもよいと考えられていたことがあげられます。そして、植民地支配下や家父長制下におけるジェンダー関係の中で構成され、女性たち自身が内面化してきた「自己抑制 (self-repression)」という規範によって、「雇用主に従順な労働者」とみなされたということが三点目です。四点目として、未婚の女性労働者の婚姻後の「自然な」離職が期待されていたことが指摘できます。つまり、女性はある年代になると、結婚して子どもを持ち子育てに従事することが「自然」であるため「自然」に離職すると考えられ、その「自然な離職」によって企業の側は変動する需要に対応するために労働者数を柔軟に調整できるというわけです。こういった要素が相互に関連して、「大規模工場生産に適した安価で、かつ雇用主に従順な都合のいい労働力」とみなされた若年女性たちが多く雇用されているという実態が明らかになってきました。

では、それまで近代セクターにおいて就労する機会が少なかった未婚の若年女性たちが工場労働に従事することによって、女性たち自身や家族、コミュニティにおいてはどのような変化、影響があったのでしょうか。こういった研究は、人類学の分野において多くの蓄積があります (これらの研究を紹介するにあたって、プレゼンテーションで使用したスライドでは参考文献リスト 1-⑥ (中谷 2005) を参照しました)。世界中の多くの地域において同じような属性を持った女性たちが、同じような職種の仕事につくということが起きていたにもかかわらず、その現状は多様であることがわかっています。映画では、農村出身の女性工具であるシーマの、都市における賃金労働に従事することによって生じる困難な状況がクローズアップされていました。実は、世界市場向けの製品を製造する工場労働が登場する以前の途上国では、多くの女性は公/私の空間の分離や既存の性別役割分業によって賃金労働に就く機会が限定され、そのことが社会やコミュニティ、世帯におけるジェンダー差別の主要な要因の一つとしてみなされていました<sup>8</sup>。そのため、女性が工場労働によって現金収入を獲得することは、女性のエンパワーメントにつながるとの観点から

<sup>7</sup> 四点目と「人種」、「新植民地主義」の視点は本講演録で加えた。

<sup>8</sup> ここでは「途上国」としたが、先進国でも同様の状況が指摘できる。

注目されましたが、それは女性の地位向上や自立性の増大には直接的に影響するとは必ずしも言えないという知見が研究者によって見出されました。同時に、結婚の時期や教育機会の変化という意味では、ライフコースの選択の可能性が広がり、女性たち自身が一定の自由を感じているということもまた否定はできません。新たに生まれた若年女性の工場労働での就労による影響や変化は、一概にいいもの、悪いものと判断がつけられるものではなく、地域ごと、そして地域内部においても多様性があるということが分かってきました。

## 【新国際分業と女性—世界経済の入り口と出口に統合された女性労働—】<sup>9</sup>

さて、ここで「新国際分業 (new international division of labor, NIDL) と女性」というテーマに移ります。世界的な政治経済体制の変化から、この映画のこと、バングラデシュの女性工員であるシーマとわたしたちのつながりのことを考えてみましょう。世界システム論 (world-system theory)<sup>10</sup> をフェミニズムの視点から批判的に再検討したマリア・ミース

**2.新国際分業と女性**

- 世界システム論をジェンダー視点から分析する研究(ミース 1997)
- 新国際分業下において、「途上国」の末端の労働者、そして「先進国」の消費者として、女性たちがグローバルな政治経済構造において不平等に結びついていることを明らかにする。

⇒世界経済の入り口と出口に統合された女性労働力(足立 2011)

- 途上国:周辺部における若年女性労働力
- 先進国:中心部における既婚女性の非正規就労(=消費者)

➢ 新国際分業が稼働する条件

➢ 「労働力の女性化」

スライド2

(Maria Mies) の分析 (参考文献リスト 1-②) によれば、「新国際分業体制」の稼働には、〈周辺 (periphery)〉途上国に末端の工場労働者、そして〈中心 (core)〉先進国には消費者として、女性たちをグローバルな政治経済構造において非対称に配置することが必要であったと指摘されました。(足立 2011: 58-59 頁)

まず、この「新国際分業」という用語について説明します。1970 年代、「それまで先進諸国に集中していた製造工業が、大量の規模で途上諸国、周辺諸地域に移転・再配置され」(足立 2011: 54 頁)、バングラデシュのような「途上諸国における輸出指向型工業化による世界市場向け工業製品生産が可能と」(足立 2011: 54 頁) になりました。このような「生産の国際化、多国籍企業の企業内国際分業が、加速度的、重層的、かつ拡張的に進行している事態」(足立 2011: 54 頁) を一般的に「新国際分業」といいます。これは、映画でも触れられていましたが、例えば日本やアメリカのような先進国では、産業の空洞化という現象としてあらわれます。これらの事態・現象は、「従来の景気循環的文脈では理解されえない世界経済の構造的変化」(足立 2011: 54 頁) として分析されました。その特質は、「ひとつの複雑な製造工程が部分的に分断、単純化されて、その部分的工程が資本にとって最も有利な地域に世界的に配置され」(足立 2011: 54-55 頁) ということにあります。一方で、途上国周辺諸地域は、世界市場向け生産のための労働力供給源として統合されます。その典型として、「輸出加工区 (Export Processing Zone, EPZ)」における多

<sup>9</sup> このテーマの説明は、参考文献リスト 1-③ (足立 2011) に依拠している。

<sup>10</sup> イマニュエル・ウォーラステイン (Immanuel Wallerstein) が代表的な論者としてあげられる。

国籍企業の製造業があげられます。<sup>11</sup>（足立 2011：55 頁）

次に、「世界システム論」について少し説明します。伝統的・一般的な経済学においては、ひとつの国つまり「国民経済」を基本的単位としていたのに対して、世界システム論では、世界規模で単一の分業関係の下にある「世界経済（world-economy）」を分析単位とします。<sup>12</sup>世界システム論に基づいて、「新国際分業」を考えてみます。そこでの「世界経済」は、工業生産の中核を形成する〈中心〉と、この〈中心〉における資本蓄積にもつぱら原料・一次産品・労働力を供給する基地として新たに位置づけられた非資本制領域が、〈周辺〉として組み込まれることによって構成されます。（足立 2011：56 頁）世界史の話になりますが、16 世紀以降の世界において欧米列強による植民地支配が進むわけですが、これはつまり、この非資本制領域にあった場所が〈周辺〉として資本主義の中に組み込まれていく過程でもあるということです。「アジア、ラテンアメリカ、アフリカ分割をもって完成する植民地体制を形成することを通して、資本主義世界システムの〈中心〉－〈周辺〉関係が構造化」（足立 2011：56 頁）されました。この関係が「古典的国際分業」ということになります。この分業が交換条件の長期的不利化による国際的垂直分業であり、植民地支配されていた国々は独立を果たした後も経済的新植民地主義として継続していきます。（足立 2011：56 頁）



映画に関連付けますと、この映画の主要な登場人物の一人であるシーマが働く縫製工場があるのは、発展途上国とされるバングラデシュでした。つまり、それまで原料や一次産品を〈中心〉先進諸国に輸出するというところしかしていなかった場所、〈周辺〉であるバングラデシュにおいて、世界市場向けの製品が製造されるようになるわけですね。〈周辺〉において「内部経済との関連が希薄な一種の飛び地（enclave）」<sup>13</sup>として、多国籍企業にとっては戦略的な場として、輸出加工区ができていくわけです。<sup>14</sup>国家戦略として輸出加工区を設置し輸出指向型の経済を志向した諸国には、工業化を果たすことにより〈中心〉－〈周辺〉関係の中間に位置付けられる〈半周辺（semi-periphery）〉<sup>15</sup>としての特徴

<sup>11</sup>輸出加工区とは、途上国に設定されるある区域で、発展途上国の雇用の増大、技術獲得、外貨獲得を目的として設置され、進出してきた外国企業に関しては関税や法人税などの優遇を行う。（参考文献リスト1-⑦第1章〔室井義雄著「総論：世界経済の構造と変容」1-51頁〕39頁）

<sup>12</sup> 前掲（1-4頁）。

<sup>13</sup> 前掲（39頁）。

<sup>14</sup> 『ザ・トゥルー・コスト』で描かれていたようなバングラデシュの縫製工場がすべて輸出加工区に立地しているわけではない。参考文献リスト2-①（長田 2014：148-153頁）や、後で紹介する参考文献リスト1-⑫（本稿15-18頁で内容に関して説明している）では、輸出加工区とその外に立地している工場の状況の違いが論じられている。

<sup>15</sup> 世界システム論においては〈半周辺〉は〈中心〉－〈周辺〉構造を安定的に維持させる機能として設定されているが、〈中心〉－〈半周辺〉－〈周辺〉関係は固定的ではなく動的に捉えられている。（参考文献リスト1-⑦第4章〔森田桐郎著「世界経済の《中心-周辺》構造」104

を帯びるようになった国々<sup>16</sup>の存在も指摘され、「世界経済」の構造的変化が明確になります。(足立 2011 : 56-57 頁)

ここで、先ほど紹介したマリア・ミースは、ジェンダー視点で分析を加えます。彼女の分析では、「世界経済」の入り口と出口に女性労働力が統合されます。入り口には、『ザ・トゥルー・コスト』の登場人物で言えば、シーマに代表される〈周辺〉途上国における低賃金の若年女性労働力が配置され、出口である〈中心〉先進国においては既婚女性の非正規雇用労働力つまり、可処分所得を持ち、かつ世帯の消費活動を担うジェンダー化された存在が、途上国において製造された製品を購入する消費者として多国籍企業が利益を生み出す最後の過程を担うようになります。後者の存在が、マリア・ミースが提示した理論の特徴的な部分です。つまり、新たに創出されたジェンダー化された消費者の存在なしには、新国際分業下において企業は利益を生み出すことができない、ということを経験したので、この「世界経済」における非対称な場所における異なる形態の女性労働力の統合そのものが、新国際分業が稼働する条件であることが明らかにされたのです。この状況こそが、現在のグローバル経済の大きな特徴の一つと考えられている「労働力の女性化 (feminization of labor)」の典型といえます。(足立 2011 : 58-59 頁) この分析が最初に提示されたのは、1980 年代のことです。映画とも関連付けて、現在のわたしたち自身が生きている状況を見ると、ジェンダーや婚姻状況が異なる多くの労働者が、この理論が示した〈中心〉先進国における既婚女性の非正規雇用労働力 (1980 年当時の日本の状況では、「パート労働に従事する主婦」などがあてはまります) と同じような状況にあり、ファストファッションの消費者となっているとも考えられます。<sup>17</sup>

### 【グローバリゼーションの最新局面】<sup>18</sup>

さて、グローバリゼーションの過程において、バングラデシュの工場で安価な労働力として女性たちが雇用されることで利潤が生み出される、ということがこの映画では描かれていましたが、それがさらに進んだ形態が今現れています。

ここで、サスキア・サッセン (Saskia Sassen) という研究者がまとめたグローバリゼーションの進展過程について少し紹介します。<sup>19</sup>第一局面から第三局面とありますけれども、『ザ・トゥルー・コスト』で取り上げられている状況は、この整理によると、第二局面に当たります。第二局面である「新国際分業」の進展の結果、金融資本主義、サービス経済

---

-136 頁] 121 頁)

<sup>16</sup> たとえば東アジア NIEs (韓国、台湾、香港、シンガポール) があげられる。(足立 2011 : 56-57 頁)

<sup>17</sup> このような状況を指してマリア・ミースは「主婦化」という概念を打ち出した。「世界経済」に統合される労働力がこれまで一般的と考えられてきた「二重に自由な労働」(具体的には、正規雇用成人男性労働などが考えられる) 以外の形態、その価値が切り下げられた労働形態での雇用が労働市場において実際には増加していると分析した。(参考文献リスト 1-② (ミース 1998) の特に 23-25 頁参照)

<sup>18</sup> このテーマについては、前のテーマと同じ参考文献 1-③ (足立 2011) と参考文献 1-⑤ (小ヶ谷 2015) に依拠した。

<sup>19</sup> 参考文献リスト 1-④ (サッセン 2004)

化が進行している最新局面を第三局面としてしています。この局面において、多国籍企業の中核機能が集中、集積する場所を「グローバルシティ」とサッセンは呼んでいます。ここでのグローバルシティとは、単に巨大な先進主要都市ではなく、世界の経済・金融の中心となっているような都市のことです。例えば、ニューヨークやロンドン、そして東京も入ってくるかもしれないですね。具体的な場

### 3. グローバリゼーションの最新局面

- 「再生産労働の国際分業」と「移動の女性化」(サッセン 2004)
  - 第一局面: 1960-1970年代初頭: 生存維持経済からの男性労働力析出過程
  - 第二局面: 1970年代~80年代: 新国際分業NIDL進展過程
  - 第三局面: 1980年代後半以降90年代/今日: 金融資本主義、サービス経済化

⇒ 具体的な場としての「グローバル・シティ」において、開発途上国から移動してきた女性たちが低賃金のケア労働者として就労。  
    > 「生き残りの女性化」  
⇒ 彼女たちの存在によって、先進国ミドル・クラスの女性たちの就労が可能になる。

スライド 3

としてのグローバルシティにおいては、多国籍企業や金融業に従事するようなグローバルエリートの日々の再生産を担うために〈周辺〉途上国や〈半周辺〉諸国から移住してきた女性たちが低賃金のケア労働者として就労している<sup>20</sup>状況があります。彼女たちの存在は、「移動の女性化 (feminization of migration)」、そして「再生産労働の国際分業 (international division of reproductive labor)」と呼ばれる現象の端的な例といえます。

「ここまでこの映画の解説で紹介する必要があったのか？」と疑問に思われるかもしれませんが、現在の日本においても外国人家事支援人材の導入政策がすすめられています。その状況が生まれる背景には「世界経済」の構造的変化が関係しているということ、そしてその変化の根幹にはジェンダーが関わっていることを、紹介しておこうと思いました。ここにありますように、このような外国人女性ケア労働者の存在 (国籍・人種・ジェンダー・職種の要素によって安価で雇用されることになってしまうわけです)、彼女たちの存在によって先進国ミドルクラスの女性たちの就労が可能になっている状況があります。第二局面では、途上国と先進国の女性たちは、それぞれの身体は離れた場所に置く形で不平等につながっていたのですが、第三局面ではその両者が不平等な関係性を同じ空間において生きるということになります。<sup>21</sup>

さて、では、再びバングラデシュの女性労働者のもとに戻りたいと思います。ここで映画の中に出てきたシーマの言葉をもう一度確認します。これは映画の終盤で、組合の代表も務めていた女性工場労働者のシーマが口にした言葉です。自分自身が置かれた状況に、

<sup>20</sup> サッセンは、「新国際分業」の進展の結果、開発途上国の農村から都市に移動してきた若年女性たちが製造業からの離職後、農村には戻れずに、サービス労働に従事すべく先進主要都市へと移住していると分析している。(サッセン 2004: 第5章「移民とオフショア生産: 第三世界女性の賃金労働への編入」)

<sup>21</sup> 「再生産労働の国際分業」のもと、先進諸国において増加している外国人女性家事労働者の存在は、〈中心〉先進国と〈周辺〉途上国間の歴史的に構築された不平等な政治経済的關係性の上に生じている。また、ジェンダー、階層、エスニシティやナショナリティに基づく不平等がグローバルに強化・再編されている構造の現れともいえる。(小ケ谷 2015: 136-138 頁) 参考文献リストでは、1-⑩ (伊藤、足立 2008) と 1-⑪ (アジア女性資料センター 2015) が関連する内容になります。

苦痛を感じていることが分かります。シーマはバングラデシュの首都ダッカに住んでいます。子育てが困難な住環境であるため、一人娘は農村部にある彼女の実家に預けざるを得ず、離れて暮らしています。そのため、子育てという「よき女性」としての規範を守れていないと、彼女は感じているようです。劣悪な労働環境や安い賃金に甘んじている自分自身の状況を鑑みて、「娘にはこんな経験をさせ」たくないと考えています。同時に、この一連の言葉からは、シーマ自身が稼ぐ賃金によって娘がよりよい将来を築くことへの希望も読み取れるのではないのでしょうか。

「娘にはこんな経験をさせ」たくないと考えています。同時に、この一連の言葉からは、シーマ自身が稼ぐ賃金によって娘がよりよい将来を築くことへの希望も読み取れるのではないのでしょうか。

シーマのような人たちが安全な環境で十分な賃金を持続的に得られ、また一緒にいたい人（シーマにとっては娘）と暮らせる、そのような状況をつくっていく必要があるという気運は、グローバルなアクティビズムにおいて高まりを見せています。

シーマの言葉

娘には私のように働いてほしくありません。  
心は痛みますが、娘がよい将来を歩んでくれれば、よい人間に育ってくれば人々は言うでしょう  
「シーマは子どもを預けダッカで働いたけど、よい教育を受けさせて立派な人に育てたね」と  
政府のよい仕事につくか、いい人と結婚できれば、私は人々にそう言われ胸を張れると思います。  
娘にはこんな経験をさせないよう、ちゃんと育てようとしています

スライド 4\*

### 【グローバルな政治経済構造の中で考え、行動するということ】<sup>22</sup>

ディーナ・シディーク (Dina Siddiqi) による研究論文 “Do Bangladesh Factory Workers Need Saving?” (参考文献リスト 1-⑫)<sup>23</sup> を紹介します。日本語に訳すとしたら「バングラデシュの工場労働者は救われることを必要としているのか」という意味になり

<sup>22</sup> このテーマについては、講演時に時間の都合で十分な説明ができなかったため、本講演録では大幅に加筆している。

<sup>23</sup> 著者のシディークは女性の文化人類学者で、現在はバングラデシュにある BRAC 大学 (バングラデシュ最大の NGO である BRAC が運営している) で教鞭をとっている。この論文のタイトルは、中東をフィールドとする人類学者であるライラ・アブー＝ルゴド (Lila Abu-Lughod) が、2001 年 9 月 11 日以降の、そしてアフガニスタン戦争開始前後のアメリカにおいて、イスラーム教徒女性を「抑圧された」「救わなければならない」存在とみなすことが、アフガニスタン戦争を正統化する政治的効果をもってしまう状況に警告を発するために書いた “Do Muslim Women Really Need Saving?: Anthropological Reflections on Cultural Relativism and Its Others” (2002, *American Anthropologist*, vol. 40, No. 3:783-881.) という論文のタイトルを踏まえたものである。(Siddiqi 2009: 154 頁 注 1) アブー＝ルゴドはこの論文を下敷きにした本を刊行しており、日本語訳が 2017 年に出版が予定されている。シディークはまた、彼女のこの論文の問題意識が呼応している研究として、同じ南アジア出身の研究者であるチャンドラ・タルパーデー・モーハンティ (Chandra Talpade Mohanty) の、”Under Western Eyes” revisited: Feminist solidarity through anticapitalist struggles” (参考文献リスト 1-⑬第 9 章「西洋の視線の下で」再考: 反資本主義の闘いとフェミニストの連帯) をあげている。(Siddiqi 2009: 155 頁) モーハンティのこの論文は 1986 年に書かれた「西洋の視線の下で: フェミニズム理論と植民地主義言説」(参考文献リスト 1-⑬第 1 章) を再検討したものである。モーハンティは、先進国のフェミニズムが、自らの「立場性」を顧みることをせずに、途上国の女性たちを「抑圧され」「救わなければならない」存在とみなしていることを痛烈に批判した。そのような考え方やそれに基づいた実践は、歴史的に構築されてきた地域間の政治経済的不平等を隠蔽し、さらには強化する政治的効果をもたらしてしまうことに注意を喚起し、そのような厳しい現実をふまえたうえで連帯していく方法を模索している。本解説も、モーハンティの議論に呼応するものを企図している。

ます。『ザ・トゥルー・コスト』を見た後では、特にどう受けとめたらいいいのか考え込んでしまうような言葉かもしれません。例えば、ここまでの説明と映画の内容を併せて考えてみますと、「グローバルな政治経済構造において「新国際分業」を通じてバングラデシュの女性工場労働者の搾取が生じ、そのうえにファストファッション産業が成立し、私たちファストファッション

#### 4. グローバルなアクティビズムとバングラデシュの女性労働者

- グローバルな政治経済構造／権力関係の網目の中で、わたしたちはどこにいるのか？どこから考え、どのように行動するのか？
- Do Bangladeshi Factory Workers Need Saving? (Siddiqi 2009)
- 第三世界フェミニズム／ポストコロニアルフェミニズムからの批判、異議申し立て(モーハンティアー 2012)

#### スライド5

の消費者は女性工場労働者の搾取に加担している」という理解に至り、先進国の消費者として何ができるだろうと考えるかもしれません。シディークは、バングラデシュのような途上国の労働者の状況を変えていくことを企図するとき、「新国際分業」のようなある特定の権力関係ばかりを取り上げて、場所や過程の個別性を無視したままグローバルな人権の考え方を先進国から途上国に押し付ける（グローバルなアクティビズムがしばしば問題解決の方途として選択する方法）ことは、ローカルな場において有効に働いていた独自の運動の力を阻害し、また別の暴力を引き起こしてしまうことが起こりうると主張します。(Siddiqi 2009:154 頁) この研究は、シディーク自身がダッカの縫製産業において15年にわたり実施した調査を基におこなわれたものです。バングラデシュの縫製産業を成立させている歴史的に形成されたグローバルな政治経済構造（特に9.11以降の状況も含みます）と生産のプロセス、そしてグローバル／ローカルな労働運動などのアクティビズムを含む国際社会とバングラデシュ国内の政治状況や個々の工場現場の動き、それらによって構成される工場内部の労働環境が検討されています。そしてその各層における権力関係とそこにどのように人種、国籍、市民権、階級、ジェンダー／セクシュアリティが配置されているかを併せて考察し、縫製産業に従事する女性労働者の状況がいかに規定されているか、また、いかにその状況を主体的に生きているかを分析しています。時間がないので内容の詳細<sup>24</sup>には言及しません。大前提として、バングラデシュの世界市場向けの製造「工場が

<sup>24</sup> 講演時には触れられなかった研究内容について一部紹介する。シディークは、バングラデシュの製造業に従事する女性工場労働者がこうむっている抑圧的状况の一つとして、職場でのセクシュアル・ハラスメント（以下、セクハラ）について、輸出加工区内と外、縫製産業とエレクトロニクス産業、工場規模の大小を比較して、どのような論理が働いて起きているのか検討している（Siddiqi 2008:167-171 頁）。もっとも多くセクハラが報告されているのは、輸出加工区外の小規模縫製工場である。シディークが明らかにしてみせたのは、一般的に差別的な人種観やポストコロニアルな感覚からイメージされる「バングラデシュ人が工場主で輸出加工区外において請負仕事をしている小規模工場だから、国際的な人権の考えが浸透していない劣悪な労働環境であり、そのため起きたセクハラ」ではない。まず、2008年当時のバングラデシュの輸出加工区内においては労働者の組織化の権利は法制化されておらず、労働組合が組織化されていた輸出加工区外の工場において、国際的な支援を受けずに最低賃金の引き上げに成功していた。しかし、この上昇した最低賃金が女性工員に対するセクハラを増加をもたらした。当時の国際政治経済状況においてバングラデシュ製の衣料品価格は下落し多国籍企業からバングラデシュの工場への支払額は減少しましたが、それにもかかわらず工員への賃金は増加したので、工場主は利鞘を確保するために工員一人当たりのノルマを上乗せするという方策をとった。さらに、縫製産業は（エレクトロニクス産業と異なり）ひっきりなしに設定される納期に

すべて搾取工場 (sweatshop) であるわけではないし、また、すべての労働者が同種の抑圧・搾取状況にあるわけではありません」(Siddiqi 2008:171 頁)。行動する時には、まず、重層的に構成されているジェンダーを含む権力構造について場所とプロセスの個別性を考慮した複雑な理解を必要とし、なによりも、「労働者自身の生きられた経験と何を優先しているのかを再検討すること、そしてグローバルな権力関係における社会正義言説と形式主義的で時にご都合主義的な人権言説の間にある緊張を認識すること」(Siddiqi 2008:172 頁)、そこからしか問題解決の方途は探れないとシディークは提言しています。また、先進国である日本に生きるわたしたちは、(シーマのような) 困難な状況にある人々を「救う」(上からのまなざしであり、それによって別の暴力が引き起こされる可能性がある) のではなく、共に大きな歴史変動の一部として彼ら/彼女らとともに動くこと、そしてわたしたち自身の状況を強く規定しているグローバルな不正義に取り組むために私たち自身の責任をより大きな枠組みで考えていくこと」がよりよい結果につながるというシディークが参照しているアブー＝ルゴドの言葉<sup>25</sup>もヒントになるかもしれません。

最後に、映画出演者の著書を紹介します。主要な出演者であるサフィア・ミニー (日本発フェアトレードブランドであるピープルツリー<sup>26</sup>の創業者) とヴァンダナ・シヴァ (世界的に著名な環境活動家)<sup>27</sup>に関しては、私自身、消費者として、もしくは著書の読者として、この映画を観る前から二人の活動に関心をもち注目してきました。

まず、サフィア・ミニーの著書に関してです。彼女がどういう経緯を経てピープルツリー、もしくはフェアトレードをやろうと思ったか、そして、その過程ではどんな困難があったのかということも、彼女自身の出自も絡めて、とてもわかりやすく訴えかける内容となっているのが、『おしゃれなエコが世界を救う』(参考文献リスト4-①) という本です。

次に、ヴァンダナ・シヴァに関してです。映画の終盤で、「システムを転換しなければならない」という言葉を何人かの登場人物が発していました。「システムを転換する」ってどういうことなんだろう、と思われた方もいらっしゃるかもしれません。ヴァンダナ・

---

追われるという特質がある。それでも、特に財政に余裕のない小規模工場は無理な納期を設定してくるオーダーを引き受けてしまう。そこで、工場内 (多くの場合男性が監督し、女性工員が監督される立場) では、工員一人当たりのノルマが増えているうえに納期を守らせるための男性監督から女性工員へのセクハラが増加した (シディークはミシェル・フーコーが提示した「規律訓練」の一種としてこのセクハラをとらえている) と、シディークは指摘した。一方の輸出加工区内の工場は、財政規模が比較的大きいため余裕のある経営であること、海外からのバイヤーを含む監視が定期的にあること、そのため騒ぎの種になりそうな要素はあらかじめ取り除かれる (例えば反抗的な工員の解雇など) ため、工員は権利は保障されず常に監視・管理を受ける、より従順さが求められる状況で労働を行っている、論じられている (Siddiqi 2008:169 頁)。同時に、シディークは工場内では監督官の男性と工員女性間の結婚やロマンティックな関係、もしくは性を利用して女性工員が賃金増額や出世をはかる、つまり女性工員の性的行為主体性 (sexual agency) と呼べるような実践があること (強制と同意の線引きは常に困難が伴うこと、セクハラがないということではないことを留保しつつ) にも言及している (Siddiqi 2008:170-171 頁)。

<sup>25</sup> Siddiqi (2008 : 171-172 頁、註 24) 本講演録で加筆した。

<sup>26</sup> ピープルツリーHP (<http://www.peopletree.co.jp/index.html>) 参照。

<sup>27</sup> ヴァンダナ・シヴァはインドの環境団体ナヴダーニャ (Navdanya) の代表を務めている。  
<http://www.navdanya.org/>参照。

シヴァはまさにこの言葉を長年実践してきた人物といえます。世界的に有名な環境活動家であると同時に、「開発とジェンダー」の研究・実践の領域においても「エコフェミニズム」という考え方の理論化において大きな影響を与えてきました。多くの著作がありますが、今日は『生きる歓び—イデオロギーとしての近代科学批判』（参考文献リスト 4-③）を紹介します。30 年も前に書かれた本ですが、近代的な世界の認識の仕方そのものに問題があること、グローバルに進展する資本蓄積が女性と環境を搾取することで可能になっている、つまり経済発展の「トゥルー・コスト」について、根本的な思考枠組みを転換することで捉えなおす内容が書かれている本です。映画を観て「システムの転換」って何なの？、「どこまで考えれば、何をすれば「システムの転換」になるの？」といった疑問を持った方には、この映画が提示した問題をより深いところからとらえ直すための材料を提供してくれるのではないかなと思いますので、最後に紹介しておきます。

少し長くなりましたが、ここで終わらせていただきます。

## グローバリゼーションとジェンダーの政治経済学から見る「ザ・トゥルー・コスト」参考文献リスト<sup>28</sup>

### 1. グローバリゼーションとジェンダーの政治経済学

- ①Elson, D. and Pearson, R, 1981, "Nimble Fingers Make Cheap Workers: Ananalysis of Women's Employment in Third World Export Manufacturing", *Feminist Review*, No.7, pp.87-107.
- ②マリア・ミース（奥田暁子訳）、1997、『国際分業と女性：進行する主婦化』日本経済評論社。（=Mies, Maria, 1986, *Patriarchy and Accumulation on a World Scale*, Zed Books.）
- ③足立真理子、2011、「グローバル経済は何をもたらすのか」小林誠、熊谷圭知、三浦徹編、2011、『文化を越えた協働 グローバル文化学』法律文化社：49-65 頁。
- ④サスキア・サッセン（田淵太一、原田太津男、尹春志訳）、2004、『グローバル空間の政治経済学：都市・移民・情報化』岩波書店（=Sassen, Saskia, 1998, *Globalization and Its Discontents*, New York: The New Press.）
- ⑤小ヶ谷千穂、2015、「人の国際移動とジェンダー」、宮島喬・佐藤成基・小ヶ谷千穂編『国際社会学』有斐閣：132-147 頁。
- ⑥中谷文美、2005、「働く：性別役割分業の多様性」、田中雅一・中谷文美編『ジェンダーで学ぶ文化人類学』世界思想社、120-143 頁。
- ⑦\*森田桐郎編著、1995、『世界経済論：〈世界システム〉アプローチ』ミネルヴァ書房。
- ⑧伊豫谷登土翁編、2001、『経済のグローバリゼーションとジェンダー』明石書店。
- ⑨大沢真理編、2011、『ジェンダー社会科学の可能性第 4 巻 公正なグローバル・コミュニティを 地球的視野の政治経済』岩波書店。
- ⑩伊藤るり、足立真理子編著、2008、『ジェンダー研究のフロンティア 2 国際移動とく連鎖するジェンダー：再生産領域のグローバル化』作品社。

<sup>28</sup> 上映会時に配布したリストに加筆修正しています。

- ⑪アジア女性資料センター、2015、『女たちの21世紀 No.83 2015年9月号【特集】新たな「移民政策」と女性』。
- ⑫Siddiqi, Dina M., 2009, “Do Bangladeshi Factory Workers Need Saving?: Sisterhood in the Post-seatshop Era”, *Feminist Review*, No91, pp.154-174.
- ⑬C. T. モーハンティー著（堀田碧監訳）、2012、『境界なきフェミニズム』法政大学出版局（= Mohanty, C. T., 2003, *Feminism without Borders: Decolonizing Theory, Practicing Solidarity*, Duke University Press.）

## 2. バングラデシュの縫製工場労働者に関するジェンダー視点からの研究書（日本語）

---

- ①長田華子著、2014、『バングラデシュの工業化とジェンダー：日系縫製企業の国際移転』御茶の水書房。
- ②ナイラ・カビール著、2016、『選択する力：バングラデシュ人女性によるロンドンとダッカの労働市場における意思決定』ハーベスト社。

## 3. 映画に関連する読みやすい本

---

- ①アジア女性資料センター、2010、『女たちの21世紀【特集】今日、なに着てく？：装いのポリティクス』No.63、2010年9月号。
- ②伊藤和子著、2016、『ファストファッションはなぜ安い?』コモンズ。
- ③長田華子著、2016、『990円のジーンズがつくられるのはなぜ?: ファストファッションの工場で起こっていること』合同出版。

## 4. 『ザ・トゥルー・コスト』出演者による著書（一部）

---

### □サフィア・ミニー著

- ①——、2008、『おしゃれなエコが世界を救う』日経 BP 社。
- ②——、2012、『NAKED FASHION —ファッションで世界を変える— おしゃれなエコのハローワーク』サンクチュアリ出版。

### □ヴァンダナ・シヴァ著

- ③——、1994、『生きる歓び—イデオロギーとしての近代科学批判』築地書館（= Shiva, Vandana, 1988, *Staying Alive: Women, Ecology, and Survival in India*, New Delhi: Kali for Women.）
- ④——、1997、『緑の革命とその暴力』日本経済評論社（= Shiva, Vandana, 1989, *The Violence of the Green Revolution: Third World Agriculture, Ecology, and Politics*, Research Foundation for Science and Ecology.）
- ⑤Mies, Maria and Vandana Shiva, 1993, *Ecofeminism*, London: Zed Books.

## 質疑

○質問者1 すばらしい映画をご紹介いただきましてありがとうございました。私は、立教大学ではアジア地域研究所の特任研究員、他大学などで南アジア地域研究の講師です。

この映画は非常にすばらしく、また、このヴァンダナ・シヴァさんには、何度か私、インタビューをさせていただいたこともありましたので、この映画の説得力を増す存在だったなと思って見ていました。

私はバングラデシュを考える上で参考になるお話をします。バングラデシュは1971年に独立し、70年代は貧困率70%で、飢餓が大変な状況があつて、そのバングラデシュも経済発展の中にあつて、今はずいぶん食糧事情も改善しました。ただ、きょうの映画で描かれた衣料品、ファッション産業については、中国の賃金が高くなり、世界的なシフトが起きていて、バングラデシュにいろいろな輸出産業が回ってきている。ただ、バングラデシュ人に聞くと、この先には今度はエチオピアなどのアフリカ諸国が自分たちを追いかける存在になってきていると言っています。それで、バングラデシュは造船産業、製薬産業、旅行産業といった産業への多角化をめざして、この今、まさにモノカルチャー経済のように、衣料品の輸出産業に頼っていることを何とか改善したいと思っているようなんですね。

ただ、この間7月にテロ事件があり、皆さんのバングラデシュに対する印象がまた一段と悪くなったと思いますが、先日ツーリズム EXPO というのが開かれ、バングラデシュが日本の旅行客の誘致に来ておりました。これは、日本的な感じでは、テロの直後に旅行の誘致もなかりうと思ってしまうのですが、実はバングラデシュでは外国人の訪問客を国ごとに数えれば、インドの次が日本なんですね。けたがちょっと違いますが、インドの次は日本が多い。日本からの NGO 関係者や、学生のゼミでバングラデシュの NGO のあり方などを学びに行く人たちがとても多いので、バングラデシュ政府としても、日本人に少しでも足を運んでもらいたいというキャンペーンをしていました。ただ、実際はなかなか厳しいと思います。

バングラデシュに関してこういう形になってしまっているけれども、さまざまな国の事情、経済構造が反映していると思いました。

アジア砒素ネットワークという日本の NGO がバングラデシュの水の汚染について支援を続けています。最近では、農村都市において非感染症、つまり糖尿病ですとか、成人病が非常に増えている。けれども、女性たちが、その病気に対する対策あるいは健康づくりについて理解しておらず、結局、エンパワーメントの課題が大きいということです。

最後にバングラデシュの貧困の事情について、食料に関してはよくなってきたけれども、人々のエンパワーメントはまだまだであるということで、日本のかわり、関与の課題も変わってきていると思います。

○質問者2 きょうはすばらしい映画と、解説をいただいたことでよりよく映画の内容がわかりましたので、本当にありがとうございました。

1つ、中村さんに、システムを変革するということに関しては、本をお読みくださいということだったのですが、どのようなことが書いてあるのかを参考に教えてください。

○中村 ヴァンダナ・シヴァのこの本、『生きる歓びーイデオロギーとしての近代科学批判』（参考文献リスト 4-③）は、どういう行動をすればよいということはもちろん書いてありません。環境と女性への搾取がなぜこんなにも進んでいくのかということ、先ほども少し申し上げましたが、近代的な物事の認識枠組みも含めて、根本的にその見方自体を、とらえ方自体を変えていかなければいけないというようなことが趣旨の本です。もう1冊、『緑の革命とその暴力』（参考文献リスト 4-④）という本も参考文献リストで紹介しています。映画の中でも種の話が出てきていました。先進国の種苗会社による高収量品種の種の導入によって途上国においてもたらされた負の影響について論じている本です。高収量、つまり一つの種あたりの収量が増えると喧伝された種を用いることによって、畑の広さは変わらず作物の収量が増えることで現金収入の増収が期待されたわけです。農業を現金収入に還元してしまうこの考え方によって、土壌、水、家畜、植物、そして人の有機的な連環の中で維持・発展してきたシステムが根幹から壊されてしまうということが起こりました。また、どのような農業システムが望ましいと考えられるかは、階級とジェンダーによって異なるということもシヴァは指摘しています。映画でも描かれていた内容に通じる状況が『緑の革命とその暴力』においても詳しく書かれています。

映画の中でも紹介されていましたがヴァンダナ・シヴァの活動<sup>29</sup>の1つに、在地の、もともとその土地にあった種を保管する実践があります。それがどういう意味を持つのかということもこの本からも学べますので、お勧めです。

○質問者3 ありがとうございます。今回、大学のイベントということで、学生が結構来ていると思うんですけども、この映画の中で結構、問題提起はあったと思うんですが、学生がすべきこととか、消費者がすべきことというのがあまり具体的に思い浮かばなかったなと思いました。例えば、ベストな案はわからないんですけども、ベターな案として、どうしたほうがいいのか、どういうことを考えたらいいということについて少しでもご提案や、ご意見をもらえればと思います。

○間々田 それは割とはっきりしていると思うんですけども、やたらにファストファッションで無駄なものを買わない。それから、機会があればフェアトレードのものとかを試してもらおう。それ以上に、そういう映画を見てわかったことをなるべく多くの人に伝えるとか、そういうようなことだと思います。

最初に言ったように、では、全然買わなかったら、また逆の問題も起こるということで、その辺を考えながらということですね。そうとしか言えない。非常に難しい問題です。だけれども、この問題の難しさを考えてもらおうというところが大事だ、という話をしたつもりです。

---

<sup>29</sup> 応答時の内容に加えて、参考文献リスト 4-⑤の *Ecofeminism* というヴァンダナ・シヴァとマリア・ミースの共著の本を紹介する。本書では、オルタナティブな経済の在り方として、伝統的な生存維持的な農業の復権を基盤としたサブシステム・パースペクティブ (subsistence perspective) という考え方が提唱されている (残念ながら日本語訳はないが、要約と解説として [萩原なつ子著 2002「エコフェミニズム」 江原由美子・金井淑子編『フェミニズムの名著 50』平凡社, 424-432 頁] がある)。

以上